

無表業と生果の功能

——加藤精神博士の「有部の無表色に對する
近代學者の誤解を匡す」を讀みて——

舟 橋 一 哉

こゝに「生果」とは「異熟果即ち果報を引くこと」を意味する。

無表業について纏めて説くのは俱舍論の業品であるが、そこでは「無表業には生果の功能はある」とも、又「ない」とも明言されてゐない。しかし私は「生果の功能はある、」と言はねばならないと思ふ。けれどもこれは業一般の有する性格としてであつて、「特に無表業なるが故に生果の功能がある」といふ譯のものではない。ところで俱舍論に説かれてゐる無表業は有部といふ一派に説く無表業であつて、この無表業説が佛教本來の立場からどのやうに批判されるべきであるかは、自ら別問題である。俱舍論や成業論に出てゐる經部からする所の批判、及び成實論の無表業説などと比較し、又阿含の所説を批評的に研究した結果としての根本佛教の業説から反照して見るときは、有部の無表業説には幾多の研討訂正せらるべき疑問があると思はれるが、無表業と生果の功能との問題もその一つであつて、私は佛教本來の立場からは、明治、大正の俱舍學者が誤つて考へてゐたやうに、「無表業は特に異熟果を引く功能を有するも

のとして建てられたものである、」と見るべきであると思ふ。

明治・大正の我が國の俱舍學者は、殆どそのすべてが、俱舍論に説かれてゐる有部の無表業をもつて、身・語の表業とそれによつて引かれる異熟果とを連鎖する役目を有するものと考へ、従つて表業は刹那に滅しても、無表業は異熟果が生ずるまで滅することなくして相續する、と考へてゐた。之に對して、有部の無表業は決してそのやうなものではなく、極めて重大なる善、不善の業を造つたとき、又三昧に入つてゐる間、そこに自らにして一種の色法を生じ、善ならば不善の法に對して、また不善ならば善の法に對して反撥する所の、一種の後天的性格或は習性とも言ふべきものを形成するものである、といふことを、初めて學界に明示して、從來の誤解を訂正せられたのは、昭和三・四年の頃「大正大學々報」で激論せられた故荻厚雲來博士と加藤精神博士とである。そして無表業のこの點に關しては、兩博士の説は一致してゐたのである。(舟橋水哉も後年自説の誤りを認めて「天下に陳謝」してゐる(眞宗同學會一ノ二四二頁)。加藤博士は本誌の前號において再びこの問題をとりあげ

てゐられるが、その所説はこの時の論争を一步も出てはゐないやうである。そして無表色（有部では無表業は色法である）が異熟果の熟するまでは續かないことを、再び力説してゐられる。けれどもこれだけを見ると、初學者は恐らく「然らば有部所説の無表業には生果の功能はないのであらう、」と早合點するに違ひない。これについて加藤博士は果して「無表色には生果の功能はない」と考へてをられるのか、或は「ある」と考へてをられるのか。この文章を讀んだだけでは判然としないが、私は業一般のもつ性能として「生果の功能はある、」と考へる。それには次のやうな理由がある。

一、俱舍論十七によれば、一切の不善と善との有漏法に異熟があると説かれるから、無表色も不善と善との有漏法である限り異熟を引く（但し「一切」の語は玄奘譯のみ。西藏譯、眞諦譯にない。併し有部の教義から推して、あつても誤りではないと思ふ。）

二、俱舍論十六によれば、例へば他人に命じて殺生を行じた時の根本業道は、無表業のみで表業はない。もし無表業に生果の功能なくば、この時の根本業道は異熟を引かぬ、といふ不合理に墮す。

三、俱舍論十三によれば、身業と語業とは表業と無表業とを自性とす、といふ。一般に身・語業は異熟を引くから、表業も異熟を引くと見るべきである。

二

以上は有部の無表業説であるが、これは有部といふ一部派（それも極めて偏つた一切實有説を主張する人々）の所傳であつて、これが佛教における無表業説のすべてではない。現存の阿舎には無表業を説くものはないが、無表業説の原意は「業による心の内容づけ」にあつたと思はれる。元來、業説といふものは、業によつて心が内

容づけられ、その内容に應じてそれ／＼の苦樂を人は經驗しなくてはならないことを説く點にあつた。そして「業」と言へば、我々が言ふ「行爲」（意志の働きである意業をも含めて廣範圍の行爲）だけでなく、その行爲によつて心が内容づけられ、色づけられた、その心の内容、色づけをも合せて「業」と稱した。このことは阿舎が傳へる所の耆那教の説として「古業（過去の業）を滅し云云」と言つてゐることや、佛教で有漏の善業を福德と稱するが、この福德にもそのやうな意味があつて特に「功德」とも譯されてゐること、などによつて明かである（拙著「原始佛教思想の研究」二四四頁以下）。十二緣起説でいふならば、それは無明を相とする行（即ち業）によつて識が内容づけられ、その内容に應じて生・老死の苦を經驗する、といふ所に表はれる。又「心といふ語には積集の意味がある」と言はれるが、これは「心は經驗の蓄積である、」或は「經驗を蓄積する場所が心である」といふことがその原意で、やはり同じ意趣を傳へるものである。南傳佛教で無表業に相當するものを説かないのは、この點で根本佛教の業説をそのまま受け繼いでゐる。

ところが北傳佛教では、「業」といふ言葉の内容に對して分析的な反省が加へられるやうになつて、我々の言葉としての所謂廣義の「行爲」の外に、業よつて心が内容づけられた、その心の内容としての業を特に表示する必要に迫られ、ここに表業無表業とを區別するやうになつたものと思はれる。ただ異なる點は、根本佛教では輪廻説を積極的に肯定して事實としてその輪廻を説くことは無かつたと思はれるから、心の内容としての業とそれに由來する苦、樂の境遇との間の關係は、極めて唯心的主體的に理解せられてゐた。ところが阿毘達磨佛教ではその中へ輪廻説をとり入れたから、兩者の關

係は、業が異熟を引く方とその力によつて引かれる異熟との間の關係として理解せられるやうになつた。その異熟を引く力としての業が即ち、大衆部の増長であり、正量部の不失壞であり、有部の無表業であり、經部の種子である。それ故に成業論（山日本一五三頁）によれば増長も不失壞も、また俱舍論・成業論によれば經部の種子も、すべて當來において愛・非愛の果報を引くところの因として説かれてゐる。従つて私は無表業も亦本來の意味においては、そのやうな役目を擔つて登場したもの（或は登場すべきであつたもの）と言はねばならない。成實論の無表業説も恐らくそのやうに理解すべきものであらう。即ち成實論七（大・三二・二九〇上）では「福德增長」を説く所の相應部一・五・七を引用して無表業が存在することの教證としてゐるが、これによつて見ると、行爲としての福德によつて心の上に殘された所の餘勢としての福德が即ち無表業であつて、従つて福德に生天の利益が約束せられてゐるやうに、無表業も亦特に異熟を引く功能あるものとして建てられたことになる。のみならず、同八（同三〇四上）には明かに「多くの無作（即ち無表）を集めて大果報を得」と言つてゐる。成實論ではこのやうな無表業を「得」の所攝とするのであるが、その「得」を説明して、同七（同二八九上）には「過去世の中、善と不善との業、未だ果報を受けざるは、衆生この法を成就す」と言ひ、「罪福が朽ちずして能く果を得る」と説く經典を引用してゐる。これによれば罪福が即ち無表業で、それは「得」の一分位であり、果報を引くまで續くことになる。

三

成實論では「無表業は果報の熟するまで續く」とする如くであつ

たが、經部が有部の無表業説に代るものとして提唱する種子も亦「果熟の位まで繼續する」と見るべきものやうである。例へば、經部が色心互熏説を説くことは俱舍論にも成業論にも出てゐるが、この説によれば、無色界にあつては色は全く斷絶するが、しかし心に熏附した色の種子が残るから、無色界より没して有色界に受生した時、その色の種子から色法が生ずると説く。これより見れば、色の種子は生を隔つても斷絶しないと見てゐたやうである。また成業論（山日本一九〇頁）に説く一類の經部師の種子説も、涅槃に至るまでは一切の種子を有する異熟識は、いかに生を重ねても斷絶しないで相續する、と説いてゐる。これは直接的には異熟識のことを言ふてゐるのではあるが、この異熟識は異熟因（即ち業）によつて（それ／＼の種子を熏附せられて？）種々になり、それらの種子を有して相續する、といふのであるから、生を替えた途端に異熟識だけ相續して種子はすべて繼絶するとは考へられない。

このやうに見て來ると、無表業の本來の意味は（有部の無表業ではない）、ただ「果報を引くといふ役目を特に擔ふもの」といふだけでなく、明治・大正時代の俱舍學者が誤つて考へてゐたやうに、「果報の熟するまで相繼して、業と果報とを連鎖するもの」と言ふべきであらう。ところが有部では三世實有、法體恒有と建てて、過去といふ領域において業が實有であれば、それだけ業果は成就するとなした爲に（このことは俱舍論における三世實有の證明の一つである）、業因と業果とを結ぶ別法を必要としなくなり、従つて無表業も亦別な性格を帯んだものとして登場したのであらう。詳細は近刊豫定の拙著「業の研究」を見られたい。

（昭和二十八年度文部省科學研究助成補助金による研究成果の一部）